

このページではコミ誌「ふれあい」で

以前特集した、第三学区出身の地元の偉人

(松本十郎・高木三郎・酒井調良)を紹介します

特集 地元の三傑（松本十郎・高木三郎・酒井調良）を顕彰する

今回の特集は、三学区出身の地元の偉人を取り上げ、我々住民の再認識と顕彰を目的に、次の3人を選びました。明治新政府の北海道開拓使判官として根室に赴き、次に札幌で北海道全体の行政を担う開拓使大判官となった松本十郎、庄内藩士として初めてアメリカに

留学し、後に鶴岡市とニューブランズウィック市が姉妹都市盟約を結ぶきっかけとなった高木三郎、そして庄内藩名家の血を引きながら、一介の農民となって様々なことに挑戦し、最終的には庄内柿の父と呼ばれた酒井調良の3人です。

北海道百五十年の功労者

松本十郎に今こそ光を！

では、当代の豪傑を官側と民間側に分けて番付にしている。十郎翁は民間側の前頭4枚目として、大関・勝海舟、関脇・板垣退助、小結・後藤象二郎、前頭・渋沢栄一、五代友厚、岩崎弥太郎に続く7番目に挙げられている。

松本十郎を顕彰する会
事務局長 田中 宏



鶴岡市立図書館脇に立つ、人の顔が彫りこまれた石碑、それが「松本十郎翁頌徳碑」だ。毎年11月には「碑前祭」を開催し、遺徳を偲んでいる。

十郎翁（戸田惣十郎）は幼名重松として、天保10年（1839）、新屋敷（現鶴岡市若葉町）に生まれ育った。戊辰戦争の後、20代後半の彼は故あって庄内藩士としての出自を隠し「松本十郎」と改名して、薩摩・長州両藩の間を奔走。庄内藩の会津への転封阻止に貢献した。

明治12年（1879）発行の「蒙御免 朝野豪傑競」

明治2年（1869）、黒田清隆の推挙により開拓使判官として根室に赴任し、漁村に過ぎなかった根室

に都市としての礎を築く。官吏・医師・移民・職工ら約130人を率いて根室に入り、漁場を希望者に配分し、税額を引き下げるなど漁業制度を改革。私財を投じて病院を建設し、その1室を教育所とした。また明治5年(1872)には、海の難所である納沙布岬と根室港の入口である弁天島に、難破船の廃材を利用して、北海道初の洋式灯台である納沙布岬灯台を建設した。

わずか4年の在任期間でありながら根室に残した足跡は大きく、市内には松本十郎の名を冠した「松本町」という町名が残る。また、根室市教育委員会が発行している小学校向け社会科副読本では、十郎翁の功績が2頁に渡って詳しく紹介されている。根室での実績が評価され、明治6年(1873)には、開拓使大判官に昇格し、札幌本庁で北海道全体の行政を担うこととなる。行財政改革の他、庄内藩士2百人余を招聘して桑園地区21万坪を開墾するなど目覚ましい成果をあげた。

十郎翁はアイヌの人々とも親しく交流し、民族衣装「アットウシ」を愛用していたため「アツシ判官」と



鶴岡市立図書館協にある松本十郎翁頌徳碑

呼ばれていた。明治9年(1876)37歳の時、開拓使長官・黒田清隆がアイヌ民族を強制移住させたことに抗議し、職を辞して鶴岡に帰郷した。

帰郷後、一切の公職につかず「松農夫」と名乗ったのは、晴耕雨読の心穏やかな生活を送ろうとした決意の表れだろう。

しかし翌年、西南戦争が勃発し、明治政

府は庄内からの決起を恐れていたため、十郎翁は密かに勝海舟らと会い、庄内への討伐軍派兵を未然に防ぐ。激動の時代は、十郎翁の活躍を必要としていたのだ。十郎翁は自費で「戊辰戦死招魂碑」(当初は大督寺、後に常念寺に移設)を建立した他、石碑への撰文を数多く手がけた。庄内全域に様々な内容の石碑が百基以

上が残っているのは、十郎翁が民衆から信頼と尊敬を集めていたことの証しだと言えよう。

大正5年（1916）76歳で没するまで書き続けた144巻にも及ぶ「空語集」は、幕末・明治・大正を生き抜いた十郎翁が遺した一級史料。解説が進み、新たな歴史事実が浮かび上がることを期待したい。

十郎翁が北海道を去ってから120年が過ぎた平成7年（1995）、

札幌市桑園地区から「明治8年に旧庄内藩士たちの手によって桑畑の開墾をしていただいたことから、今の私たちがいる。この歴史を大切にしていきたい」との申し入れがあり、酒井家および十郎翁の自宅がある鶴岡市



根室市歴史と自然の資料館で十郎翁について学ぶ小学生

第三学区と交流することになった。

翌年8月には、桑園地区にある北海道知事公館の敷地内に建つ「桑園碑」の前で毎年挙行されている「桑園開拓まつり」に、当時の第三学区コミュニティ協議会から鈴木吉治会長、山路勝信副会長、相馬順吉副会長、渡部俊一郎事務局長、中村昭太郎第三学区町内会連合会会長、鶴岡市職員として鈴木寿和、村田久忠両氏が参加。当日、姉妹提携盟約調印式も行われ、20年以上経った現在も、第三学区と桑園地区の友好関係は続いている。

平成28年（2016）9月、北海道で、山形県人會が中心になって《松本十郎を称える會》が発足し、北広島市で盛大な頌徳祭が開催された。十郎翁と北広島は、北海道稲作の祖と称される中山久蔵との縁で固く結ばれている。今こそ温暖化の影響もあってコメの一大生産地になっている北海道だが、その原点は久蔵翁が明治6年（1873）に北広島に入植し、苦勞の末に赤毛種での稲作に成功したことにある。

札幌赴任時代に久蔵翁と意気投合した十郎翁は、鶴岡に帰った後も良き友として文通を重ねた。それらの手紙は国指定史跡「旧・島松駅通所」（中山久蔵宅）に展示されている。ここは明治10年（1877）に、

クラーク博士が「青年よ大志をいだけ」の名言を残した有名な場所でもある。昭和13年（1938）の北海道開拓70周年記念の年、札幌の北海道神宮内に「開拓神社」が創建された。その際、黒田清隆や伊能忠敬、間宮林蔵など開拓の功労者三十六人が祀られたが、黒田に辞表を叩きつけた十郎翁は含まれず。昭和29年（1954）に1名が追祀された際も見送られた。しかし、開拓の大功労者である十郎翁が含まれていないことを疑問視する声は少なくなく、昨年（平成30）、北海道150年を機に、祭神として加えられた。

さて、札幌市のすぐ北にある石狩市には、万延元年（1860）、幕府の命を受けた庄内藩が北方警備のために築いた国指定史跡「庄内藩ハマシケ陣屋跡」がある。長らく草地になっていたが、平成26年（2014）に「庄内藩陣屋研究会」が発足する等、石狩市では復元への機



当会の北海道研修で訪れた北広島市の中山久蔵邸

運が高まっているとのこと。同年11月、石狩市教育委員会や札幌山形県人会の方々が来鶴した際、当会や鶴岡市にも協力要請があった。若き日の十郎翁が勤務した陣屋の姿がよみがえる日も近いかも知れない。

昨年は「西郷どん」ブームもあり、鹿児島と鶴岡の関係に光が当たった。戊辰150年明治150年北海道150年を経た今こそ、十郎翁の再発見・再評価を進めながら、鶴岡の近代を見直す好機ではないか。札幌・桑園地区と第三学区の姉妹提携盟約、木古内町および名寄市と鶴岡市の友好都市盟約、そして石狩市。北海道との繋がりが

も深めていきたいものだ。

.....

●松本十郎を顕彰する会 お問合せは事務局まで

0235-22-0068（家中新町・田中宏）

庄内藩士高木三郎と

ニューブランズウィック市



戊辰戦争のさ中の明治元年（1868）11月、勝海舟邸を訪れた高木三郎と仙台藩士富田鉄太郎の二人を海舟は一喝した。

「君たちは何のために帰って来たのだ。」

米国に留学していた二人が内戦の報を耳にするや藩の命運や恩師海舟の身を案じて七カ月もかけた命がけの帰国を果たしたというのである。

海舟は続けた。

「戦乱は予期していたこと。今さら何を狼狽している。君たちを渡米させたのはこの戦のその後に対応するためだ。今すぐ米国へ戻れ」

二人はわずかひと月の滞在の後再び海を渡る。

三郎は天保12年（1841）に庄内藩士黒川友文の長男友敬として生まれた。しかし、ゆえあって親戚筋の高木姓を継ぎ高木家を再興して名も三郎と改める。小姓として幼君に仕えつつ文武に励み、水練や馬術も

得意としたが、特に弓術には秀でていた。14歳（年齢は全て数え年）の時深川三十三間堂の百射通しで97本を記録している。

20歳からは勝海舟の軍艦塾で操船を学び、幕府の護衛艦に勤務する。富田とは軍艦塾以来の仲であった。

慶応3年（1867）、海舟は海軍技術の習得のため子息の小鹿（こぞく）を米国留学させる。三郎と富田はその随行を命じられた。米国西海岸まで航路四カ月、さらに一か月半を要して初めの滞在地ボストンに着き、二人はここで明治の時代を迎えた。

三郎とニューブランズウィック市（以下NB市）との関わりは冒頭の一件に関連する。帰国を決意した二人はまだ14歳の小鹿を軍艦操練時代の知人に託した。

「高木三郎翁小傳」（明治43年の長男正義の著書）によると「横井小南の甥にあたる伊勢という人物」とあるが、これは他の資料から横井佐平太であることがわかる。

当時佐平太はNB市のグラマースクール（ラトガース大学の前身の一つ）に留学していた。このため三郎と富田も再渡米後はNB市を拠点とする。



つまりは二人が祖国を案じて命がけの帰国を決意したからこそ生まれたのがNB市との関わりだったことになる。藩士であり武士である二人には祖国の動乱に目をつぶってボストンに滞在し続けることなどできなかった。二人を叱りつけた海舟もそれは認めており、「三千里の海を越えてはるばる帰って来た志は咎めることではない」と女中にもらしている。

三郎は留学後も米国に留まり弁務使館書記、臨時代理公使、副領事、領事を歴任。退官帰国後はその能力を買われて生糸輸出を一手に担う同伸会社②の役員に迎えられ、その手腕を奮う。高木の活躍もあって明治の繊維産業は日本の経済力を一気に押し上げた。

さて、明治初期の外交と貿易にかくも寄与した高木三郎であるが、残念ながらその名は歴史書にはほとんど登場しない。例えば明治6年、高木は森有礼から代理公使の職を引き継ぎ、日米郵便条約の締結を成し遂げているが、独立国たる姿を対外的にも示す象徴的な条約であるのにあまりふり返られることはない。また同伸会社と言えば創立者の速水堅曹の名は挙がるが高木の名はあまり知られていない。しかし条約締結も生糸産業の振興も三郎の語学力や米国仕込みの経営学の知識なくしてはありえなかった。三郎は後年社長職に

も就くが、ほぼ一貫して実務を担い、その飾り気のない性格は実に質素な自宅の佇まいにも現れていた。

こうした三郎の勤勉実直さや祖国愛の精神には時代を越えて学ぶべきものがある。NB市との交流を通して永く語り継いでいきたいものである。(文責伊藤博)

②明治13年(1880)農商務書記官速水堅曹が設立した生糸輸出を扱う商事会社。外国商人に握られていた取引習慣を打破して対等な取引を行うことを目指した。
参考文献 ▼高木正義著「高木三郎翁小傳」 ▼姉妹都市盟約五十周年記念誌 ▼高木不二筆「横井佐佐木 太平のアメリカ留学生生活」



友好協会会長(本町一丁目在住)
滝川義朗氏に聞く

◇滝川さんが友好協会に加わられた経緯は？

昭和58年にNB市のラトガース大学に語学留学しました。その関係で協会立上げの発起人会に加わり、それ以来ずっと協会の活動に携わっています。

◇NB市とはどんな町ですか。

ニューヨークからは車で40分ほど。大都会に隣接するベッドタウンで、ラトガース大学を中心とする学園都市といった佇まいの町です。有名な製薬医療機器メーカーであるジョンソン&ジョンソンの本社があること

でも知られています。

◇NB市との交流にはどんな意図がありましたか。

庄内藩士高木三郎はNB市で学び、後に外交官として日本と諸外国との交流の礎を築いた先駆者です。その交流を受け継いでいきたいという思いがありました。

◇姉妹都市の盟約を結んでから協会の設立まで二十年以上の間があるようですが？

昭和35年当時海外との姉妹都市締結は先駆的な取組でしたが、なかなか具体的な交流にまでは進まず、グリーティングカードの交換など文書交流が中心でした。

昭和57年にNB市長の招聘で齋藤第六市長ら9名が訪問したことから交流促進が図られることになり、翌58年に友好協会が設立されます。その陰にはNB出身のD・A・ハイライン氏の存在が大きかったと思います。ハイライン氏の「鶴岡で英語指導に当たりたい」という熱意が市関係者の協力を呼び、同氏はその年の10月に来鶴。三年間に渡って鶴岡でALTとして教壇に立たれています。

◇今後の交流計画は？

平成31年2月に八年ぶりに中学生らの派遣を予定しております。2020年には60周年を迎えますが、その事業計画も今後進めてい

くつもりです。

鶴岡市とニューブランズウィック市

主な姉妹都市交流の足跡

- 昭35 鶴岡ロータリークラブ会長の訪米にあたり市長からNB市長へ親書を送り姉妹都市提携成立。
- 昭57 NB市長の招聘により市長らがNB市を親善訪問。
- 昭58 友好協会設立。D・A・ハイライン氏来鶴。
- 昭59 NB市長らが来訪し姉妹都市宣言書に署名。
- 昭61 NB高校音楽使節団来訪し交流事業に参加する。
- 平2 市長ら18名が30周年記念使節団としてNB市を訪問。
- 平3 NB市日本人墓地に高木三郎の娘の墓を再建。
- 平6 NB市へ中学生八名らの訪問団を派遣(以後平14まで連続)
- 平7 NB市長ら親善使節団来訪。
- 平8 市長一行と市民訪問団がNB市を訪問。
- 平9 「日米草の根交流サミット」開催。NB市からも生徒7名らが来訪し教育プログラムに参加。
- 平11 NB市教委副教育長らが来訪し関係者と意見交換。
- 平12 NB市教育関係者訪問来訪。
- 平14 鶴岡市が「世界に開かれた町」自治大臣賞を受賞。
- 平14 市議会副議長、教育長、友好協会会長らがNB市を訪問し同時多発テロへの義捐金を贈り各種交流事業に参加。
- 平16 中学生訪問団派遣再開。NB市高校生訪問団が来訪。
- 平17 市議会議長と友好協会会員らがNB市を訪問。
- 平18 ラトガース大学図書館名誉教授のルース・シモンズ氏来訪。講演し高木三郎の活躍を顕彰。
- 平19 リビングストーン校を中心とする訪問団が来訪。その後NB市長と姉妹都市委員ら来訪。
- 平22 市長ら盟約50周年記念訪問団を派遣。盟約の継続確認書へ署名。その後NB市訪問団が来訪しNB市長が記念講演。

平 23 中学生11名らの訪問団を派遣。その後NB市から東日本大震災の義捐金が送られる。
平 24 NB市訪問団来訪。その後ハリケーン・サンディの被害を受けたNB市へ義捐金を贈る
平 28 NB市国際交流課長らが来訪し教育交流の打合せ。
平 29 NB市長ら訪問団が来訪。
平 30 教育長らがNB市を訪問し相互交流の打合せをする。
平 31 中学生訪問団派遣。

人と人とのつながりを知る

第二回訪問団員 三井 光（泉町在住）

私は第二回目の中学生訪問団として平成7年にNB市を訪問しました。当時の日程は約三週間のホームステイと現地学校での学習、ニューヨークやワシントンDCなどの大都市を一週間視察する内容でした。

学校では一応現地の生徒と同じように授業を受けるのですが、もちろん内容はチンプンカンプン。覚えているのは社会科見学でNB市の誇る世界的な企業であるジョンソン&ジョンソンに行った時のことです。きれいで未来的で巨大な会社・工場に圧倒されつつ、説明を聞いてもやっぱりチンプンカンプンな私を同級生は気遣って何度も声をかけてくれました。

ホームステイ先はいわゆるアメリカの閑静な住宅街という感じのお家でした。本当にお世話になりました。

なにしろほとんど英語がしゃべれないので、伝えたいことが伝わらずに困ることが多かったと思います。それでもお母さんは一緒にお菓子作りをしてコミュニケーションをとってくれたり、庭にはバスケットボールが設置されていて、その家の子と毎日バスケットボールをして遊び、体を動かしたりしながら距離を縮めていきました。そんなふうにして言葉だけでないコミュニケーションの取り方を学びました。

ニューヨークでは、あのマジソンスクエアガーデンでNBAの試合を観ました。プレーのレベルの高さももちろん凄かったです。観客を巻き込む演出、大人も本気で興奮しスポーツ観戦を楽しむ雰囲気は、当時日本では感じられないものだったと思います。

ネットが普及した現在は日本に居ながらにして海外とつながることが容易にできます。それでも海外に出て直接現地の雰囲気を感じたり、日本人のいない中に身を置いたりすることで、かえって日本に居るより日本がよく見えるということはあると思います。また、人と人とのつながりは世界共通で大切だということも鶴岡を引っ張っていく子どもたちにはぜひ自分から求めて海外に出て、視野を広げて欲しいと思います。

庄内柿の父 酒井 調良

《忠勝公の弟の血を引く家柄》

調良は嘉永元年（1848）鶴ヶ岡城下鷹匠町（現若葉町）に生まれた。初代庄内藩主酒井忠勝の弟である了次の血につながっていて、代々玄蕃を名のついでに、七代目の玄蕃、了明吉之丞が調良の父である。それまで千石以上の禄高を持つ重臣として藩侯に仕えてきたと言われる。

調良は13歳で藩校致道館に学び、17歳の時藩主忠篤公の近習となり、慶応3年（1867）20歳の時にそ



大正5年 全国農産品評会に
平核無柿を出品し2等を受賞
(市郷土資料館提供)

良

の職を退いた。男3人の兄弟で、兄は玄蕃の名を継いだ了恒吉之丞、戊辰戦争当時24歳の美青年であったが、勇猛果敢で敵軍に「鬼玄蕃」として恐れられたという話もある。3歳下の調良も兄と共に出陣した。弟与八郎は後に黒崎研堂として知られた漢学者、書家で絵もうまかった。戊辰戦争清川口の戦いを描いた額装で、土佐絵風の作品が遺っているが、兄2人が騎馬姿で、政府軍を迎え撃つため出陣する勇姿を描いている。3人とも俊秀だったが長男は33歳で病死した。

明治4年に藩制が廃止され、特に東北諸藩の下級武士団は北海道開拓に新しい生き方を求めた。調良は、明治5年（1872）25歳で禄を離れ、養蚕で身を立ようとして自宅の畑に桑の木を数百本試植した。

士族授産のため、広瀬村後田山（後の松ヶ岡）の開墾が始まったのもこの年である。調良も翌年からこの開墾に加わり、松ヶ岡農場建設に協力した。刀を鋏に代えて大地を耕すことに生き甲斐を感じた帰農者も多かったが、酒井調良もその1人であった。

《製糸業の隆盛を目指す》

明治9年（1876）には維新後の首都を視察しよ

うと東京に出て、輸入超過のため大きな貿易赤字を抱えていることを知る。そして「国富」のために生糸の輸出を盛んにする必要のあることを痛感し、養蚕の上にもさらに製糸業を興すべきことを考えさせられて帰った。

翌年には松ヶ岡開墾地内馬渡山に住居を移した。それまで仲間とともに鋤をふるって拓いた山林は15町歩(15ha)を超えたという。

明治13年(1880)になると、私財を投じて鶴岡市内に製糸会社盛産社を設立し、2年後には横浜港から初めて庄内産出の生糸が輸出された。

調良は、山梨、群馬、福島などの先進地を視察しながら研究を重ね、足踏み式製糸機を考案したり、また、蚕糸業組合を組織し、その組合長に推されたり、県立生糸検査所の鑑定係を委嘱されたりとまさに八面六臂の大活躍をする。がしかし、その活躍期間はわずかに9年、軌道に乗り始めた蚕糸業組合を解散することになったため、製糸事業から手を引いた。自筆の履歴書に「明治11年故ありて松ヶ岡開墾の業を辞し鶴岡に帰る」という一行があるが、この「故ありて」の意味するものは端的に言って、松ヶ岡の最高指導者菅実秀と意見が合わなかったことだという。

《果樹への道》

明治26年一介の農民となって、西田川郡袖浦村(現酒田市)黒森に土地を求めて家を建てた。砂防林の陰に植えたものは、数年前から自家栽培を始めていたリングゴである。寒地にも有利な洋種のリングゴ栽培は庄内で調良が一番手であった。そして自営の栽培者であるだけでなく、全産地の品質の向上や名称の統一を図り、不要な競争を避けるために進んで主唱者となり、庄内三郡リングゴ名称一定会なるものを作って事務所を余目町に置いた。

調良が柿に転換したのは明治32年(1899)に端を発している。友人の鈴木重光(鳥居町)が越後の行



鶴岡市指定の文化財として、鳥居町の鈴木勇氏宅に今も遺る庄内柿の原木

商人から買い求めて植えた柿の鑑定を依頼され、次のように書き残した。

「其ノ形状 平穩ニシテ豪牙ナラズ 色沢鮮麗ニシテ美貌アリ 肉質快爽ニシテ粘着ナラズ 甘味濃厚ニシテ溶液多ク 加フルニ無核ヲ以テス」。

それで早速小枝をもらって接ぎ木し、苗木20本を得て更に接ぎ木を重ね苗木を150本に増やして、核無し柿栽培の土台を作った。

《「渋」から「甘」への酬し方》

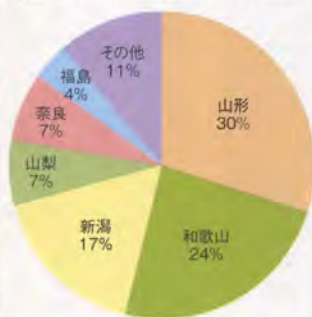
大正9年（1920）には、黒森に古樹83本、中樹240本、鶴岡の本宅に1,350本があると記している。また大きな問題として脱渋があったが、これも調良の粘り強い活動によって解決の方向を得た。従来の湯ざわし法では完全ではなく、自家用にしかならない。それを焼酎による脱渋に成功したのは、農科大学教授で農学博士の原熙氏との出会いによってである。

明治42年（1909）11月、県主催の第2回園芸家禽品評会が山形市で開かれた時、調良は核無し柿を出品したが、その時審査に来た原博士に面接した。調良は懐中の柿を取り出して鑑定を乞うたところ柿を掌ののせてじっと見つめていた博士は、稀に見る良種である

から大いに地域に普及してくれと激励した。その場で「核の無い柿であること、脱渋に苦心していることを告げたところ、その夜品評会の慰労会が料亭四山楼で催された時、そこへ調良を呼び出し一室を借り切つて2人だけとなり、アルコールまたは焼酎で渋抜きを試みるよう2時間にわたり語つてくれた。酒席からは博士を何回か呼びに来たが応じず、終列車の時刻まで話し続けたという。

間もなく調良は上京して原博士を訪ねたが、その時に「平核無し柿」という名をつけてくれた。しかし脱渋は必ずしも思うようにはいかず、異変果を出したりして苦心した。大正8年になって千葉県の青果問屋緑川清治郎という人が松根油採取に来た時、調良の家も訪

全国の平核無し柿の栽培面積 (H.24調査)



柿の品種別生産量 単位=ha (H.22調査)

原	品種名	栽培面積
	総計	16,306.4
1	富有	3,978.1
2	平核無し	2,692.7
3	刀根早生	2,394.2
4	甲州百目 (蜂屋・富士)	986.6
5	松本早生 (富有)	916.2
6	早生系次郎	531.5
7	市田柿	513.1
8	次郎	430.6
9	堂上蜂屋 (蜂屋)	385.8
10	西条	376.5
	その他	3,101.1

れ、雑談中に脱渋の話になった。そして渋を抜く桶は古い物ほど密閉不能となって焼酎が洩れたり、黴菌が発生して異変果を出すのだという経験が縁川は語ってくれた。そして焼酎の分量や目塗りの方法なども教示した。更に、県農業試験場の技師にも指導を受け、容器も樽に拘らず瓶などの密閉性の高いものを使用することによって、完全な脱渋の技術を身につけていったのである。

《人との交流と生活理念》

調良は後に自らを「好菓翁」と称し、黒森の家の果樹畑は「好菓園」と名づけた。その真向いに原瀬題額、大森豊雄撰文、黒崎研堂書の好果翁寿碑が建っているが、その中に調良の性格を親友であった松本十郎の言葉が引用されている。

「慧敏強壯事に遇うて機略風生して回避する所なく必ずその志を達して而して後止む」

黒森では、近所の富樫家から14歳の守平という養子をもらい、農業の後継者とした。守平は長じて調良とともに庄内柿の栽培普及に力を注いだ。

調良は生家の方と二つの家庭を持ち、黒森に果樹栽培農民としての夢を結実させた。

坂野辺新田

(酒田)の佐藤滝蔵という篤農家を慕い、その死に際して長文の悼辞をささげている。そして鈴



鶴岡公園内大手門跡の傍らに建つ、酒井調良翁の胸像

木重光や松本十郎がもつとも親しい友人であったが、特に松本との間柄は兄弟の如くであり、ともに「学農一体」の生活を理想としたようだ。

調良は謹厳な字を書き、柿苗を植えた人には字を書いて賞とした。50本植えた者には半折1軸、百本にはふすま紙4枚、150本には六枚屏風半双、300本には六枚屏風一双を与えている。坂野辺の農家の人達は、ほとんどがそういう物を貰っていると聞く。

晩年中風を患い、大正15年(1926)10月に療養中の湯田川温泉七内旅館で没した。家中新町大督寺に葬られ、法名は「好菓院殿徹誓調良居士」。

.....
(市郷土資料館にある「月刊グラフィ山形(No.21)」の、真壁仁氏による「庄内柿の父酒井調良」から多くを引用させていた。 文責/加賀山捷三)